

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第五部

第三十章

sign

峯村 明

リ・コンストラクション

登場人物

30・sign

288.

289.

290.

291.

292.

293.

294.

295.

あとがき

奥付

登場人物

桧山 健	H & L 財団・財務部門勤務
〃 ひろ	健の妻
A. パウジーニ	健の秘書
サーディク	エドミールのステージネーム
X & Y	サーディクのボディーガード
クリスマン	ポルタアウレアの国務長官
竜門渕 優美子	メルノ

288.

「どういことですか——」という言葉しか出て来ない。

「ほんとうに」、と健。

「僕はオーストラリアで生まれ、三歳で両親と死別、以後日本で育った。両親のことは名前しか知らなかった。

母親のソフィアがパリにいた時にコウイチと出会い、コウイチについてオーストラリアへ渡り、僕が生まれた、そのことを知ったのはほんの一年前のことで、それも、エドミールに会ったおかげでした。彼に出会わなければ何も知らずにいた。この原稿に書かれていることも作り話に思えたでしょう」

「私は日本語が読めません。健が途中まで英語に訳して聴かせてくれたのですが」、とエドミール。

——このことで健もひろも頭を抱えていた。ふたりともこういうことにまったく縁がなかったし、縦書きの原稿に横書きの英語訳をつけるのは途方もなく面倒な作業だと、すぐに気がついた。しかもエドミールは急かしてくるのだった——

「一枚目で耳を疑った。ディミトリエという名の貴族が出てくるのですが、ソフィアが辟易しているのがわかる。

じっさい、こいつは、もとい、ディミトリエ子爵は叔母にぞっこんだった。よく花が贈られてきてたし、叔母のお気に入りだった私にはチョコレートが贈られてきたな」

顔をしかめる彼にすかさずひろがつっこむ。「チョコレートお嫌いなの？」

「べつに嫌いじゃないが、その頃私は母親の手ほどきでバレエに没頭してた。体型と体調の管理上、こういうものは勘弁してもらいたいのだ。ある日はっきりそう言ってやったが、にっこりと聞き流された。チョコレートは翌週また贈られてきた。おかげで周囲の者たちが私の代わりに太った。そんなわけで、やつは人の話を聞かないのだ。叔母も同じ見解だった」

「ふーん……と、こんな具合に、この原稿はエドミールにとっても興味深いものなんです」

「そうなんです、敬愛する叔母上にパリでなにがあったのか、手紙以上のことを私は知るすべがなかった。だがこの原稿には、ディミトリエのやつが叔母をパリまで追いかけていったことが書かれてる。叔母の出立を見送る時は、『寂しい、とても寂しい。あなたがお帰りになるまで、わたしはしおれたバラの花のように過ごすでしょう』とかなんとか言ってたくせに。しおれる前に会いに行ってたとは！ だいたいですね、しおれたバラの花など、うちのバラ園にはひとつもない！ しおれる前に摘んでしまうからです！」

「……と、こんな具合に、エドミールにしゃべらせておくときりがないので、この原稿を英訳したいんです。お願いできますか、竜門渚さん」

「は？ あたくしが？」

「僕はこの手の作業はまったく向いてません。理系なので」

「あたしも無理です。体育会系なので」

「ニホンゴワカリマセン」

「は、はあ……手書きの日本語を英訳？」桧山夫妻に熱心に詰め寄られて、ユミコもつられて考え込んでしまう。

「……縦書きの日本語を英語に……え……と、この原稿をデジタルデータ化すれば……」

「必要なものは？」

「日本語入力できるパソコン、かしら……それとインターネット」

健はすぐさまどこかへ電話した。驚くような行動力だわとひろがこっそり感心する素早さ。

「作業にどれくらいかかりそうですか、お部屋も確保しなくちゃ」

「昨夜泊まらせていただいた部屋がありますけど、あ、ホテルに荷物を置きっぱなし」

「取りにいかなくちゃならないのね、あたし、ご一緒します」

リビングルームでおとなたちが騒いでいるところへ、真が起きてきた。両親のほかにお客さんがいるのを見てきょとんとしている。過日の事件は真のなかにどんな影響を残すだろう。医師たちも、わからない、と言っていた。でも今朝はいつもの真だ。「——おはようございます！」

玄関がノックされて、パウジーニが顔をのぞかせた。もうパソコンの手配ができたのかと健が思っていると、そうじゃなかった。

「サーディク先生はこちらにいらっしゃいますか？」

「え、私？」

「エントランスにお客様が見えているのです。クリスマンさまとおっしゃる方で……」

「クリスマン？」怪訝に訊き返したサーディクの顔つきがみるみる変わった。「あ！！」

「誰なんだ？」

「こくむちようかんだっ！！」

「こくむちようかん？」

「昨夜の定時連絡を入れてないんだ！！ ま、まずいっ！！」

口走りながら長い脚でローテーブルをまたぎ、玄関を飛び出して行った。

「なんて騒々しいやつだ。真、テーブルをまたいではいけないぞ」「ほんとよ。コーヒーが台無しじゃない！ こうなったらみんなで食堂へ行って朝ごはんにしましょ」

昨日の非常事態も職員向けにはとうに解除されている。

H&Lは他国との時差の関係で二十四時間営業、深夜勤務している者も早朝に出勤してくる者もいて、食堂は彼らのために早い時間からオープンしているのだった。

みんなといっしょに部屋を出ようとしたパウジーニはバラムに呼び止められ、朝ごはんを要求されていた。

＊

H&L本部エントランスに三方向から三人が駆けつけてきた。エントランスでは小柄な老人が十人ほどの大男たちに囲まれて待ち構えていた。

「でんかー」老人は唸った。「ご無事でなによりですがっ。いったいどういうことですかっ！」

「「こ、これには深いワケがっ！！」」

三人は同時に口を開いた。国務長官は面倒な相手らしい。

昨日の非常警報以降、一般人が集まっていた劇場は安全のために完全に隔離されていた。物理的にも、通信手段も。

通信機器が使えないため、ワークショップ中の学生の家族が連絡がとれないことを心配するかもしれない。そのため、その旨を、H&Lのスタッフが館内の別の場所から各家族に連絡した、という報告をサーディクは受けていた。

そこで安心してはいけなかったのだ！！

連絡がとれなくて心配し、現地へ押しかけてくるのは学生の親御さんだけではなかったのである。

国外にいる皇太子殿下の安否の確認がとれないとわかった国務長官はその瞬間に席を立った。殿下の所在地ブリュッセル郊外ではこの日、空軍のヘリコプターが撃墜されたとか、空中で木端微塵に散ったとかいう真偽不明の情報も入ってきたばかりで、みなぴりぴりしていたのである。自分の部下を引き連れて空港に到着した長官は、十人超の別動隊と鉢合わせした。彼らは殿下のボディーガード集団だった。

連絡を取り合っていなかった双方は互いににらみあいながら、この瞬間に、「やはり殿下になにかあったのだ！」と悟ったわけだった。

まあ、こういうトラブルを防ぐために毎日の定時連絡を欠かせなかったのだが、もはやあとの祭りであった。

290.

「だいたい、なんですかそのネコの毛だらけの服装はっ！！」

「こ、これにも深いワケが——」

「ええい、ネコの毛のワケなど聞きとうありませんわっ！！ 連絡がとれないとわかって飛んで来てみればこの体たらくっ！！ キミらもキミらだ、なにをしておったのだっ！！」

X&Yにも火の粉が降りかかる。

「お取込み中のところ失礼いたします」と割り込んできたのはパウジーニである。「お部屋をご用意いたしました。ご案内します、ささ、みなさんも」

早朝のエントランスと真ん中で繰り上げられる騒ぎには、はや、人だかりができていたのだった。

ポルタアウレアご一行を別室へ誘導し、不機嫌に稲妻を迸らせている国務長官をなだめ、昨日館内で人が失踪するという事件が起き、その捜索と一般人を安全のために隔離したために起こってしまったトラブルだと、総裁の有能な秘書は語って聞かせた。

「一般人とは、十代の少年少女とその保護者、そしてエドミール様とお付きの方々です。財団にとって、どちらさまもこのうえなく大事なお客様、過剰な対応だったかもしれませんが、みなさまの安全を第一に考えてのこと。そして——間をおかずに駆けつけてくださったみなさまのご心痛を想いますと、斬鬼の念に堪えません。しかしながら、エドミール様の安全確保がすべてだったこと、なにとぞご理解いただきたく——」

ベルギー空軍の件はH&Lは全然関知していないのだからコメントのしようがない。
その件繋がりで空から落ちて来た異物でH&Lのバンケットホールが全壊したことはポルタアウレアには関係ないし。
他国の地での皇太子誘惑、いや、誘拐未遂事件など、ポルタアウレア国務長官が知ったら……未然に防がれたことは黙っていよう。ついでに殿下の献血も黙っていよう。

パウジーニの説明の背後には実にさまざまなことが起こっていて、サーディクたち三人も無関係ではなかったから、三人が三人、本国への定時連絡をすっかり失念していたとしても、無理からぬことだった。

それでもパウジーニの真摯にして神妙な態度と、此度の過剰な対応はおたくの皇太子殿下の身の安全をとにかく、最優先にした結果なのだという言い回しは、殺気立ったクリスマン長官の責任感とプライドとを慰撫したようだった。

エントランスでエドミールらがもめているのを見た健がパウジーニに耳打ちしたというのもある。恩を売っておいても損はないぞ、と。

クリスマン長官のことは昔から苦手だったんだよな—と、お小言を聞き流しながらエドミールは考えている。思い起こせば……クリスマンの夫人はソフィアお婆さんの養育係だったのだった。

クリスマン夫人は、それはそれはソフィアを厳しく仕込んだ。ソフィア五歳の時からテーブルマナーから礼儀作法、裁縫、刺繍、乗馬——いやいや、夫人の厳しさをそういうのではなく、なんと、リベラルアーツを教えこんだことである。リベラルアーツとは数学、幾何学、天文学、文法、修辞学、弁証法、音楽、つまり"自由な知的探求"、"幅広い教養"である。

大公家の公女たる者、このような教養に幼少時より馴染んでおくべきである、というのがザフムリオン夫人の考えだった。大公家のためにそれなりの家柄の男と結婚して子孫を残すというよりも、大公家のために自立せよという考えだったのだ。

そしてソフィアがまた能力の高い人で、幾何学だろうが天文学だろうが、どうってことない、という人だった。

指導する方もする方なら受ける方も受ける方である。

ソフィアの絵画と音楽はむしろ、息抜きの域だったわけだが、ディミトリエ子爵などは彼女の愛らしい外見と柔らかな物言いだけに夢中になり、隠された知性に気づいていなかった。

だから——あのソフィアがおとぎ話のような恋をしてくにを捨てた——エドミールにはどうしても受け入れられなかった。華やかな土地で芸術のなかに身をおいたからだろうか。そんなふうに解釈するしかなかったのだ。それはクリスマン夫人も同じだったろう。ソフィアの音楽学校留学は息抜きにちょうどよろしい、くらいに考えて、率先して送り出したのに。ふたを開けてみたら外国人と駆け落ちとは——

失意のクリスマン夫人の姿は目も当てられなかった。目元涼しい美しい人だったのに、あっという間に老婆と化してしまった。彼女の夫、クリスマン長官の心中も察して余りあれば、大公家の人間に当たりがきついのもわかる。

思い起こせば苦々しいのだ。ソフィアを連れ去った桧山光一という男の存在が。

「……ター、スター！ マスター！」

「ん？」

「廊下に、学生たちが！」

＊

Yに言われるまま、会議室の扉を開けてみると、そこには学生たち、ばかりでなく、かれらの保護者までもがずらりと揃っていた。

「——どうしたんだ」

すると、いならんでいた学生たちから次々と声が上がった。「先生！」「先生！」「サーディク先生！」「先生！」

彼らの顔には、（おじいさんに苛められてる先生を助けに来ました！）と書かれていた。それはそれでかっこ悪い話ではある。

一歩前に進み出たのはフィルだ。

「ぼくたち、自主練したいんです！ でも劇場は清掃とメンテナンスでしばらく使えないんですって。先生、どこか場所をお借りできませんか！」

本日はワークショップ最終日、最後の仕上げをしなければならない。自主練したいというのも当然だった。それとなく聞き耳を立てていたパウジーニに、この部屋はいつまで使えるのかと尋ねると、終日、ということだった、

「なるほど、わかった。ではこの会議室を使いなさい。彼ら？ すぐいなくなる」

292.

クリスマンがそれを聞きとがめた。「なんとなれば、でんか、我らとともに帰国ということでよろしいのですな」

「なんでそうなる。帰国は明日だ。今日はまだ仕事が残っている。きみらはもう用向きは済んだんだろ？ 心置きなく帰ってくれたまえ」

「ちょ、ちょっとでんか！！」クリスマンはエドミールの腕を掴み、強引に部屋の隅まで引きずった。「今日はどうしても帰っていただかなくては！！ 大公妃殿下が会いたがっておられるのです！！」

「母上が！？ 加減がお悪いのか！？」

「お加減に波があるのはご存知でしょう？ 今まさに波のどん底、我らがやってきたのも虫の知らせやも知れず、このような時は一刻も早くご帰国を！！」

「……」

「でんか！！」

「クリスマン、私にも仕事がある。H&L財団と契約し、学生たちを指導すると約束した。きみはそれを反故にせよと？」

「し、しかし、本業ではありますまい……」

「そういう問題ではない！ 学生たちにも財団にも将来がかかっている。私はなんとしても成果を挙げてから締めくりたい」

「うう……」

「今日一日時間をくれ。母になにかあったとしても、きみの責任ではない。私が父母に謝る」

「……………」

「ヒマだったらブリュッセル観光でもしてきたら。なんなら手配してもらおう」

「いえ。そういうことでしたら、今日一日、でんかのお仕事ぶりをじっくりと拝見いたしましょうじゃありませんか」

クリスマンと話ながら、エドミールは己のボディーガード衆を目で追っている。ボディーガード予備軍である。

（何人来てるんだ……十……五人？ 十五人？ ふだん別の仕事してるやつらまでちゃっかりついて来やがって……いや……これは……わざと、か）

（そうか、犯人はZだ！ やつにバンドの件をもらしたのが間違いだったのだ！！）

これはまずい。これでは——バンドどころかフルバンド(あとがき参照)が組めてしまうではないか！！

こっちを見てにこにこ笑っているそのZを手招きする。彼は嬉しそうに飛んできた。

（お呼びをお待ちしておりました！）

（呼んだわけじゃない！）

（マスターと連絡が取れないなどという、こんなチャンスを見逃す手はありません！）

（なんのチャンスなんだ）

集団で移動する口実にできるということだ。

（何となれば、我々はプロですから）

（だからなんのプロだ！）

やはりZは仲間を引き連れて乗り込んでくるチャンスを虎視眈々と狙っていたのだ。得物も持参しているにちがいがなかった。

（やるぞ。せっかくだから）

（ぎょい！！）

ユミコはひろが運転するポルシェで市内のホテルへ向かった。部屋を引き払って荷物を財団の宿舎へ移さねばならない。

(慌ただしい……)

用事が済んだらすぐに日本へ帰るつもりだった。日本で何かが待っているわけではない。ただブリュッセルにいる必要がなかっただけだ。

ところが……ユミコ自身が持ち込んだ原稿を英訳する作業ができてしまった。日本で育った桧山健には日本語で書かれた原稿は問題ないが、健よりもエドミールが問題だった。彼は日本語が読めない。

「エドミールさまは叔母のソフィアさまの失踪がとても堪えたというの。ひんぱんに来ていたハガキが急に来なくなって、気がついたら留学先のパリからもいなくなって……パリで、ソフィアさまになにがあったのか、まるでわからなくて。ただの知り合いとかじゃない、心から慕っていたひと。そのひとの消息がわかるなら、って、藁にもすがる気持ちなのね……」

「……………」

「まだほんの子どもだったから、おばさまが、どこの誰だか知らない男と駆け落ちしたんだってわかった時のショック。思い出したくないくらい、深い傷になって残ってる、って。そのどこの誰だかわからない男が、健のお父さんなんです」

「桧山さんとエドミールさまとはいとこの関係になるのね？ とても仲がよさそうにみえますけど……」

「彼らは、考えないようにしてるんじゃないかな。だからかな、ことあるごとにしょうもないことでケンカしてます。きっと、お互いに辛いんだろうなって……」

「……………」

「だから健は、自分の両親として、よりも、エドミールさまのおばさまとしてのソフィアさまのことをはやく教えてあげたいと思ってるんです。それでユミコさんに無理をお願いしてしまいまして」

自分が持ってきた原稿にそんな影響力があるとは思ってもみなかったユミコは言葉もない。エドミールからはすでに依頼があった。明日、帰国するにあたり、彼はブリュッセルを去る。原稿の翻訳はまだ時間がかかるだろうから、自分と同行してもらえないかという。翻訳作業は彼の母国で、ということだ。彼らの関係とそれぞれの気持ちを想えば、ユミコに否やはない。思いがけないことだが、行こう。ポルタアウレアへ。

「ひろさん。どうか、私に気をお遣いにならないで。持ってきたのは私なんですから」

294.

「あの、ユミコさん」

「はい？」

「ユミコさんは、竜門淵、というお名前なんですね？」

「ええ」

「あたし、聞いたことがあるんです。竜門淵さまとは、水神、竜神の一族だって」

「……………」

「本当、なんですね？」

「竜門淵の始祖は竜だということです」

ひろは詰めていた息を吐きだすように言った。

「その始祖という人が、イリチャのおかあさんでしょう？」

ユミコは思わず、えっ、とひろを見た。そしてひろが続ける言葉を聞いた。

「イリチャと関係ありますよね！？ だって、ユミコさん、イリチャにそっくりですもの！ ブリュッセルにいらっしゃるのも偶然じゃないでしょう？ もしかしたらユミコさんがイリチャの——！」

「ひろさん、私はたしかにイリチヤに似ているかもしれませんが。けれども、私の魂は彼の母親ではありません、まったくの別人です」

「そ……………」

「ひろさんも、健さんも、気づいていらっやらないようですけれど」

「……なにが、ですか？」

「実は、あたくし自身、エドミール様に指摘されるまで気がつきませんでした。あの原稿、書いたのは奈々子ではありません」

「え。でもっ！」

「筆者名をご覧になりましたか？ ローマ字で、mitsuha、となっています。その人こそ竜門淵の祖、イリチヤの母親です」

295.

芸術部門ワークショップ最終日。受講した学生たち全員を舞台上に上げて、サーディク先生は一名一名、細かく講評した。それぞれの特性について。評価できる点について。今後の課題について。

そもそも、サーディク本人が多分野に渡って活動し、さらに学生を指導するという試み自体、新たな取り組みだったから、ひじょうに意欲的だった。こういうエネルギーは、伝染する。ことに表現者を志すような感受性の強い人間にはなおさらである。

ゆえに、学生たちは自分自身に向けられた先生の言葉とまなざし、態度に大きな感銘を受けた。新たなスイッチが入ったようなものだった。

この最終日にやって来た人々もいる。学生たちをふだん指導している教師たちだ。彼らとの関係も視野に入れなければならないとサーディク先生は考えていたし、講評もそのことを含んでいた。つまり、ふだんの指導者から多くを学ぶよう示唆を与えたわけだ。

「きみたちは今回のワークで特別な教師に学んだわけではないのだ」、とサーディクは締めくくった。「音楽は特別な芸術ではない。それはきみたちの内奥から自然にあふれ出るものだ。だから

こそ、きみたちの表現に接した者は"心に響く"経験をする。日々、日常、今この時、この瞬間を、感じる。表現する。きみたちの家族、先生、学校、友人、すべてが互いに響きあっている。今この時を、分断と怖れではなく感謝と歓びとともに、きみたちの心が感じるままに生きること、それこそが、私がきみたちに望むものだ。そして私自身、きみたちから実に多くのものを得た。ありがとう。みなさん」

彼の声はよく通り、よく響く。講評はマイクなしで行われ、それは劇場の隅々にまで行きわたった。言葉には抑揚があり、手振り身振り、表情は言葉より雄弁だった。彼のパフォーマンスでもあったのだ。

一連のプログラムが終了したのは午後遅い時刻。

バイオリン・サーディク、ピアノ・Yの演奏で学生たちは舞台から退場する。ショパンの別れの曲。照明は徐々に落ちていく。これでおしまい。感傷的な雰囲気学生だけでなく、立ち会った大人たちもこみあげるものを感じ、胸があつくなるのだった。

からになった舞台にはバイオリンとピアノが残り、最後の一小節を弾き終えると――

リーーンン.....ゴォーンン.....

H&Lではこの鐘の音が終業の合図である。これから夜勤に入る者も残業に入る者もいるが、とにかく、学生も大人も、一日が終わった。劇場では私語もなく、みな余韻を味わっていた――

(.....あれ?)学生の一ひりがふと気がつく。舞台のカーテンが音もなく降りていく。演(だ)しものが終わったらカーテンはすべて上がるはずでは??

(え.....なんで?)

見れば舞台上にはさっきまでブラックスーツで神妙にバイオリンを奏でていたサーディク先生が、上着を脱いで白シャツを腕まくりしているではないか。

「さて！」頃合いを見計らってサーディク先生は声を張った。

「学生諸君の時間はこれにて終了！ ladies and gentlemen！ ここからは、大人の時間だ！」

ぱちり、と指が鳴った。

場内はいっしゅん静まり返り、そして騒然となった。

ステージでは全員黒服のフルバンドがスタンバっていたのだ。

30・「sign」

31・「」へ続く

あとがき

え～、前回第二十九章ですが、公開直後(9月20日、21日)にダウンロードしてくださった方にはたいへん申し訳ないんですが、22日に表紙画像を差し替えました。ちょっとね、ミスがありましたもので。

『国務長官』というのは、アメリカ合衆国にしかない閣僚なんだそうで、外務大臣と同じ意味です。どちらの名称がかっこいいか、という基準で国務長官になりました。

フルバンド(=ビッグバンド)について

『実力の揃った大勢のプレイヤーを要するビッグバンドは、デジタルミュージック主流の現代にはコスト的にも割に合わない、過去のもものとされている。が、そのゴージャスなサウンドは他の演奏スタイルでは表現できない得も言われぬ魅力がある』

<https://reminder.top/174154323/>

上記の記事は『Tokyo Ensemble Lab』というグループについて書かれたもので、うちの作中でのイメージはアルバム『Breath from the Season』から、オープニングに『Lady Ocean』、続いて『Junky Express』てな感じです。よかったら聴いてみてください。“彼ら”が演奏してる、と妄想しつつ。電子書籍にYouTubeや音楽ファイルを貼ることはできますが、まあ、著作権がありますから。

なお、フルバンドの編成は、

サクソ:5本(アルトサクソ2本、テナーサクソ2本、バリトンサクソ1本。アレンジによってソプラノサクソが加わる)

トランペット:4本(1番トランペットが最も高い音域を演奏、2番、3番につれて音域が低くなり、4番が最も低い音域となる。ソロは一般的に1番以外が演奏する)

トロンボーン:4本(テナートロンボーン3本、バストロンボーン1本)

フレンチホルン、ユーフォニウム、チューバ、フルート、コルネット、クラリネットなどと持ち替えることがある。

ベース、ドラムス、ピアノ、ギター、各1

一部パートの省略や同一パートを複数人で演奏するなどで人数の上下があるが、だいたい総勢17人前後

エドミール殿下が自分の影武者を育てた結果(第4部 第23章 In Brussels のNo.238 参照)、予備軍がフルバンドが組めるような実力をつけてしまった、というわけです。

奥付

リ・コンストラクション

第三十章 sign

2025年 9月30日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[イラストAC](#)

[imagescreate](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社